

## ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その十六）

海老沢 敏

### 十、遊戯歌としての《ルソーの夢》（承前）

先に引用したロンゲの《英語キンダーガルテン実用案内書》の第二版序文で、フレーベルのシステムの大きな特徴として《夢ユムになること》が挙げられていた。これはまた《無心の遊び》とも訳したが、フレーベルの教育体系の中では、幼児の活動のかたちを示す《作業》なる概念に対応する英語であることは明らかである。幼児のもつ活動衝動や作業衝動は遊びや作業といったかたちであらわれてくるが、それらはまた一体でもあり切り離しがたものともいえよう。そして歌もまたそこで重要な意味をもち、不可欠の働きを示している。フレーベル系のキンダーガルテンで

は、こうして、歌は遊戯歌として、幼児たちによって歌われ、かつ遊戯としての身体運動を伴なうものとして位置づけられるのである。

そうした観点から《キンダーガルテンリート》としての《ルソーの夢》、すなわち《楽しい眺め》を考察してみると、すでに触れたように《準備の歌》、あるいは《導入歌》として位置づけられている点が注目される。つまり《音楽体的運動》に幼児たちが入る前に歌われる目的を設定されていることになる。訳出した五節の歌詞を読んでみると、この歌が、幼児自身によって歌われるというよりも、むしろ、仲間と仲睦じく遊びたわむれる幼児たちの姿が、父兄や教師に好ましくも楽しい印象を与えるさまが、いわば父兄や教師の立場から歌われるかたちをとっているのであ

る。それはまたこうした幼児たちの交情が、人類の幸福、福祉にもつながるといふ結論を導き出してしめくられてきているのだ。

なぜ《ルソーの夢》がこうした〈準備の歌〉として、英国のフレーベル幼稚園、英語キンダーガルテンの教育体系の中に位置づけられたかについて考察してみよう。私は、とりわけ英国にあって、《ルソーの夢》が、讚美歌として、そしてまた子守歌として、すでにながい間歌いつづけられ、成人のあいだでも、また幼児や少年少女たちのあいだでも、だれひとり知らぬものではなく、しかも、この上なく親密なかたちで、万人の記憶の裏に刻み込まれていたためと推測するのである。讚美歌は信仰を同じくするひとたちが、よろこびにつけ、悲しみにつけ、神を讃えるために、共有感情のうちに声を合わせるものであろう。幼児たちも、すでにさまざまな機会に、すくなくとも耳から、そのようにして歌われた讚美歌としての《ルソーの夢》の旋律を聴き取り、記憶の中に蓄わえていることであろう。その旋律は、しかしさらに初源的な体験のかたちで、みどり児のころから、この上なく親しい人たち、たとえば母親によって、耳許で歌われていたものであったろう。それは母親の声音のかたちで、幼児の魂の中に刻印されていたはずである。とすれば、そのような旋律、歌を、

母親や先生や、あるいは仲間が歌うことによってはじめられるキンダーガルテンの遊戯の世界は、幼児たちにとって、はじめからまことに印象ぶかくも親密な世界として立ち現われてくるものであったろう。《ルソーの夢》の旋律が、ここ英国のキンダーガルテンで、はじめから選び取られたことは、けっして偶然ではない。

フレーベルのキンダーガルテンの運動は、英国よりわずかにおかれて、アメリカ合衆国にも導入されたものであった。アメリカにおける幼稚園の発展の中で、いわゆる〈開拓期〉と呼ばれるのは、ボストンを中心地として、フレーベル主義による教授法が強調された時期とされている。<sup>(注8)</sup>英国におけるキンダーガルテンの運動にひとつの転機をもたらした一八五四年のロンドンにおける教育博覧会は、アメリカからこれに参加した教育指導者たちにも強烈な印象を刻み込んだものであった。アメリカ合衆国連邦政府教育長官ヘンリー・バーナードは、フレーベル幼稚園紹介の一文を《アメリカ教育雑誌》(第二巻、一八五六年)に掲載したが、これこそ「アメリカにおける幼稚園に関する最初の文献」<sup>(注9)</sup>といわれるものである。

(注8) 《世界教育史大系21―幼児教育史I》三一三ページ。

(注9) 同右書三一四ページ。

この論説が発表されるに先立って、前年の一八五五年にはウィスコン州のウォータータウンで、ドイツ系のカール・シュルツ夫人なる女性により、アメリカ最初の幼稚園が開設されていた。この夫人はドイツ在任時代にフレーベルから幼児教育に関する指導を直接受けていたこともあり、亡命先のアメリカでフレーベル流の幼児教育を実践しようとしたものであった。さらに一八五八年にはオハイオ州のコロンブスで、おなじくドイツでフレーベルに直接教えを受けていたキャロライン・ルイーゼ・フランケンベルク夫人によって第二の幼稚園が設立されたあと、一八六一年には二園、六二年にはニュー・ヨークで二園と確実にドイツ系のフレーベル主義幼稚園が増加し、一八七〇年までの十五年間にドイツ人によるドイツ語会話幼稚園の数は十園に達したといふ。<sup>(注10)</sup>

(注10) 同右書、三一四ページ—三一五ページ。

こうしたアメリカにおける幼稚園教育の「開拓期」にあつて、とりわけ重要な存在は、エリザベス・パーマー・ピーボディ（一八〇四—一九四）である。ポストンで書籍業をひらいていた彼女は、フレーベルの名著《人間の教育》に深い感銘を受け、かつ、既に紹介したバーナードの雑誌論文に触れて、幼稚園教育に関する烈しい情熱を燃え上らせたのであった。彼女は一八五九年にはシュルツ夫人の訪問を受け、翌年、ポストン市ピンクニー街の自

宅で、「アメリカ最初の英語会話幼稚園」<sup>(注11)</sup>を開いた。彼女の義理の弟にあたるホリス・マン（一七九六—一八五九）はアメリカの名高い教育行政家であった。ピーボディはフレーベルの理論と実践をより深く高めるために、一八六七年にはドイツに赴き、フレーベルの未亡人ルイーゼ・レーヴィンに就いている。翌年帰国した彼女は、「フレーベル主義の普及徹底のために定期刊行物を発行したり、数多くの著作や論文あるいは教授や講演を通して、アメリカにおける幼稚園教育運動の先駆的な伝道者としての役割を果たすことに、その余生を捧げてきた」<sup>(注12)</sup>のであった。

(注11) 同右書、三一六ページ。

(注12) 同右書、三一七ページ。

こうしたピーボディ嬢の幼稚園教育活動の中から生み出された文献のひとつに《幼児の徳育とキンダーガルテン案内書》<sup>(注13)</sup>がある。初版は一八六三年の年号をもっており、前述のホリス・マンの夫人で、ピーボディの妹メアリーとの共著である。

(注13) 《Moral Culture of Infancy, and Kindergarten Guide,

With Music for the Plans. By Mrs. Horace Mann and Elizabeth P. Peabody. Sixth Edition. New York: J.W. Scribner & Co., 1876.

これこそ、アメリカにおけるキンダーガルテンならびに幼稚園

に關する最初期の文献のひとつであり、とりわけ重要なものといえよう。公刊後十三年で第六版という重版の数は、この書物がアメリカでキンダー・ガルトンの文献としてひろく読まれ、普及していったことを端的に物語っている。

この書物は「アメリカのキンダー・ガルトン」と銘打たれた本論全十三章のほか、メアリー・マン夫人による「幼児の徳育」と題されるおよそ一〇〇ページのエッセイからなり、さらにそのあとに一〇ページに亘り、合計二〇曲の歌が収録されている二三〇ページ弱のものである。フレーベルの幼児教育思想を基礎としながらも、こと音楽に関しては英国における英語キンダー・ガルトンの歌を全面的に取り入れていることは、巻末の譜例を一瞥すれば明らかであろう。ただし、ジャンル別の区分はおこなわれておらず、また曲数も三分の二ほどに減じている。

この「アメリカのキンダー・ガルトン」にあつても、音楽と遊戯、体育、踊りが重要視されていることは言うまでもない。第三章「音楽」の冒頭では、「キンダー・ガルトンに必要とされる第一のもの(注14)は音楽である」と謳われており、その根拠として「旋律を声に出して歌うことは、子供の意志を統御し、あるいはむしろ無秩序の原因である気まぐれをなくしてくれる」ことを挙げている。

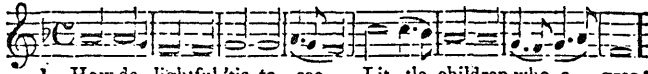
さらに続けてこの案内書では、学校が始業される際に歌われるも

のとしての二つの讚美歌を紹介している。そのひとつは「主の祈り」であつて、これは楽しい音楽につけられていると解説されているが、これは「英語キンダー・ガルトン実用案内書」のもう一曲の「準備の歌」である「仕合せなおうち」の旋律に「あめにまします／われらのちちよ／聖名をあがめて／たふとませよな」(「新選讚美歌」第二十六)の原詩「Our Father, who art in heaven」をあてはめたものである。

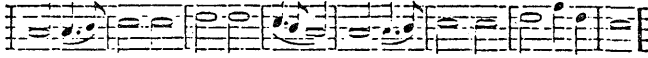
(注14) 同右書、二二ページ。

もう一曲の「讚美歌」こそ、タイトルは挙げられていないが、「準備の歌」の活動を始める歌としての「ルソーの夢」にはかならない。この曲は、この「アメリカのキンダー・ガルトン」案内書では、「魚」をばさんで第三曲として置かれ、「兄弟愛」(Brotherly Love)なるタイトルがつけられているが、五節からなる歌詞は、すでに訳出紹介した「楽しい眺め」とまったく同一である。(譜例③)なお、このアメリカ版キンダー・ガルトン案内書の第三章では以下、音楽の初歩の学習について論じられ、じっさいの学習課程が具体的に説明されている。その内容についてはここで紹介することはできないが、注目されるのは、ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの代りに数字1から7までが音階(長音階)の各音にあてはめられ、数字による唱法で音階の学習がおこなわ

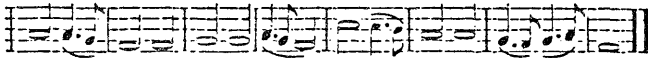
## III. Brotherly Love.



1. How de-lightful 'tis to see Lit-tle children who a-gree;



Who from every thing ab-stain, That will give each oth-er pain;



O, how lovely 'tis to see Lit-tle children who a-gree.

2.  
Angry words they never speak,  
Promises they never break;  
Unkind looks they never show;  
Love sits smiling on each brow.  
O, how lovely, &c.

3.  
They are one in heart and mind;  
Courteous, pitiful, and kind;  
Willing others to forgive,  
And make happy all who live.

4.  
When at home, at school, at play,  
They are cheerful, biithe, and gay;  
Always trying to increase  
Human pleasure, social peace.

5.  
If we for each other care,  
All each other's burdens bear,  
Soon the human race will be  
Like one happy family.  
O, how lovely, &c.

れるよう提案され、それが実践されていることである。ここでは  
いわゆる楽譜の学習が目指されているのではなく、したがって、  
数字譜の提案がおこなわれているわけではないが、数字による音

楽の初歩の学習という着想については、ルソーとの関連でいずれ  
また立ち戻って論じなければならない。

このアメリカ・キンダーガルテン案内書ではつづく第四章〈遊  
戯、体操、踊り〉において、巻末の実際的な〈遊戯歌〉の説明が  
おこなわれていることを注記しておきたい。

なお、アメリカにおけるフレーベル流のキンダーガルテンの案  
内書として知られているものには、アードルフ・ドゥーアイの  
〈キンダーガルテン〉<sup>(注15)</sup>がある。この書物には出版者シュタイガー  
宛てのピーボディの書簡が掲載されているが、それによるとほか  
ならぬこのドゥーアイが「ボストンにおける最初のアメリカ・キ  
ンダーガルテン」<sup>(注16)</sup>を一八五九年に設立したものと考えられてい  
る。それはドイツ子弟のための私的な学校であったが、ドゥー  
アイはその後フレーベルの学園で訓練を受けたドイツ人教師を呼  
んで、自らの子供の教育にあたらせたという。こうした経験か  
ら、ドゥーアイはより規模の大きいキンダーガルテンで教育にあ  
たる教師たちの指導のための案内書を書くことを思い立ったので  
あった。勿論この書物の特徴をあげつらうことは、ここでは適当  
ではないが、この著書に収められた合計四十六曲におよぶ遊戯  
歌、児童歌の中には、《ルソーの夢》の旋律が見出されることが  
だけは触れておきたい。これらの歌にはいずれも英語とドイツ語

の歌詞がつけられ、どちらでも歌えるようになっていたが、フレール系のドイツ語ならびに英語の歌曲集からひろく集められ、ドイツ民謡、あるいは民謡化したドイツ歌曲（たとえばモーツァルトの《春への憧れ》〔K五九六〕など）が見出されるのである。

(注15) 《The Kindergarten. A Manual for the Introduction of Froebel's System of Primary Education into Public Schools; and for the use of Mothers and Private Teachers by Dr. Adolf Donai. New York: E. Steiger. 1871.》

(注16) 同右書Vページ。

## 十一、日本人の歌として

前章では《ルソーの夢》が英国やアメリカ合衆国において、フレール系統の幼稚園、いわゆるキンダーガルテンの中で、《遊戯歌》として、そして幼児の心身を遊戯へと集中させるへ準備の歌として歌われていったことを述べたが、この《ルソーの夢》の旋律、すなわち《むすんでひらいて》の節は、現在でも英国では幼児たちに親しまれているといわれる。

ところで、こうしたフレールのキンダーガルテンの幼児教育システムが、日本に紹介されたのは明治初年のことであった。日

本において、幼児のための教育が制度上の規定としてはじめて定められたのは、明治五年（一八七二年）であった。この年の八月三日に頒布された学制の第二十二条には、「幼稚小学ハ男女ノ子弟六歳迄ノモノ小学ニ入ル前ノ端緒ヲ教ルナリ」と謳われている。しかしながらいわゆる尋常小学校を主体とした小学校教育をはじめとして、中等教育、高等教育の制度は、この学制を基礎にして強力なかたちで体系化されていったのに対して、《幼稚小学》は（注1）一校も開校されることがなく、無力な規程にとどまっているのみであった。その理由は学制の範となり基礎となったフランスの学制における幼児教育機関の規程を形式的に導入したためと考えられている。こうした事情から、日本における「幼児教育機関の発展は、この幼稚小学とはかかわりない姿で、実体化されてきた」（注2）といわれる。こうした点でもっとも大きな影響があったのが、「わが国で《幼稚園》という名称で最初に開設された東京女子師範学校附属幼稚園」であったとされている。明治九年（一八七六年）の創設である。

(注1) 《世界教育史大系21—幼児教育史I》三三二ページ。

(注2) 同右書三三二ページ。

だが、それに先立つ幼児教育の試みと、その中に位置づけられた《遊戯歌》について語る必要があるだろう。第三章および第四

章で主人公をつとめていたほかならぬ伊沢修二が「小学唱歌集

初編」の編集刊行をおこなった中心人物であることはくりかえすまでもないが、彼が唱歌集を編集することで、小学校の音楽教育

の中心的な抛り所を創り上げるにいたるにはいくつかの重要な体験を経ることが必要であった。そのなかでもとりわけ大きな経験

はアメリカ留学であろう。この伊沢修二のアメリカ行にあずかつて力があつたのはアメリカ人デイヴィッド・マリー（一八三〇—

一九〇五）であつた。マリーは一般にモルレーないしモローと呼ばれているが、ラトガース大学教授に在任中、駐米代理公使森

有礼の推薦を受けて、日本に招かれ、文部省学監となり、明治六年から十一年まで、この職にあつた人物であり、日本の教育制度

確立にあずかつて力のあつた存在である。そのマリーが伊沢修二のアメリカ留学を強力に推したのは、伊沢の手になる「唱歌遊

戯」に関する文章が彼の目にとまつたためといわれている。<sup>(注3)</sup>  
(注3) 上沼八郎著「伊沢修二」(「人物叢書」日本歴史学会編集

吉川弘文館発行) 五四ページ。  
それは文部省が発行していた官報にあたる「文部省第二年報」

(明治七年)に掲載された「愛知師範学校年報」の一部である。  
伊沢修二は明治七年三月、「第二学区愛知師範学校長」に任じ

られたが、当時、若冠二十四歳であつた。その伊沢校長によつて

<sup>したた</sup>認められた報告書の当該箇所を引用してみよう。

(注4) 同右書、四九ページ。

「将来學術進歩ニ付須要ノ件

唱歌嬉戯ヲ興スノ件 唱歌ノ益タルヤ大ナリ第一知覚心経ヲ活

発ニシテ精神ヲ快樂ニス 第二人心ニ感動力ヲ発セシム第三発

音ヲ正シ呼法ヲ調フ以上ハ幼生教育上唱歌ノ必欠ク可ラサル要

旨ノ概略ヲ挙クルノミ其細目ノ如キハ喋々此ニ辨セス我文部省

早ク此ニ見アリテ小学教科中唱歌ヲ載スト雖モ未タ実ニ其科ヲ

備フルモノアラス今吾輩西洋ニ於テ著名ナル教育士フレーベル

氏其他諸氏ノ論説ニ從ヒ先本邦固有ノ童謡ヲ折衷シテ二三ノ小

謡ヲ制シ日ヲ累子年ヲ積テ大成全備ノ効ヲ奏センコトヲ期セリ即

チ其一ニ例ヲ左ニ示ス

唱歌ハ精神ニ娛樂ヲ与ヘ運動ハ支体ニ爽快ヲ与フ此ニ者ハ教育

上并ヒ行シテ偏廃ス可ラサルモノトス而シテ運動ニ數種アリ方

今体操ヲ以テ一般必行ノモノト定ム然レモ年齒幼弱筋骨軟柔ノ

幼生ヲシテ支体ヲ激動セシムルハ其害却テ少カラスト是レ有名

諸家ノ確説ナリ故ニ今下等小学ノ教科ニ嬉戯ヲ設ク即チ左ノ圖

ニ因テ其一ニ例ヲ示明ス

そしてこのあとに、三曲の唱歌とその遊戯の仕方が説明されて  
いるのである。(つづく) (国立音楽大学)